別冊 広報たかはま

新春特別号

p2 対談 しあわせってなんだろう？

山崎亮さん（コミュニティデザイナー）×高浜市長

p7 コラム 「豊かさ」から「しあわせ」へ

p8 自分自身がうごくことがしあわせ

p10 私+たかはま

たかはまを一人称で語るなら

大家族たかはま
しあわせ まちづくり

たかはまには、なーんにもないなんて思っとったらもったいないわ。そこにもここにもいい笑顔があるじゃん。
こどもやまごたちも、「たかはまが好き」って言ってくれとるよ。しあわせだら？
いっぺんちょっと、たかはまに住んどる「しあわせ」について考えてみよまい。

平成27年
1月1日

対談

コミュニティデザイナー
やまざきりょう
山崎亮さん

×

高浜市長
よしおかはつひろ
吉岡初浩

しあわせってなんだろう

―自分で楽しさを生み出せる人は人生ずっと楽しい―

みんなが「幸せ」を感じ、「いつまでも住み続けたい」と思えるまちにしたい。
そのために高浜市は「しあわせづくり計画」をつくります。
この計画づくりには、全国で「人がつながるしくみづくり」に携わっている、話題のコミュニティデザイナー山崎亮さんにもご協力いただいています。
高浜市を訪れた山崎さんと吉岡市長が語り合った、まちづくりの「しあわせ」とは？

いま、社会の「幸せ」の概念とは

市長：山崎さんの協力も得て現在策定している高浜市の「しあわせづくり計画」では、市民の方たちのなかにある、まちづくりへの参加のしかたや想い、地域での〝こうしたい〟や〝できる〟を表していきたいと思っているんです。現在、高浜市では5つの小学校区すべてに「まちづくり協議会」があり、市民主体で地域全体を巻き込んだ活動が注目されて他の自治体から視察が来るほどになっています。本当に皆さんいきいきと活躍されていますが、ただ、まちづくりはずっと続くものですし、それを支える今後のためには若い世代の参加が必須です。なおかつ職員はもっと力をつけなくてはならない。私は「幸せ」はみずからが動くことで生まれるものだと思っていて、それをもって計画づくりにあたっていきたいのですが、今社会的に言われている「幸せ」、山崎さんの考える「幸せ」とはどのような姿でしょうか？

山崎さん：今の日本で語られている「幸せ」の概念は、1970年代ころに話題になった「真の豊かさとは何か？」という問いかけから始まったと思います。私には中学時代に出会った本『豊かさとは何か』（暉峻淑子著1989年）が「豊かさ」を考えるスタートでした。

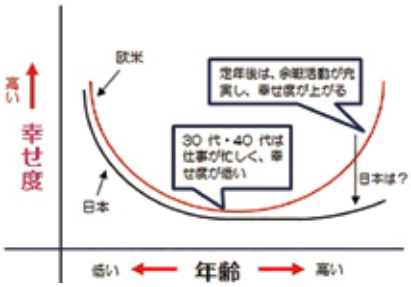
1990年代初頭ころまでは、多くの人がイメージする「豊かさ」とはお金やモノで測れるようなものでした。しかし、ブータン国王が就任時に語ったGNH（国民総幸福量）への共鳴が欧米・日本に広がり、「豊かさ」論は「幸せ」論に変化したのです。また、オランダの大学が経済学の見地から「あなたは幸せですか？」という問いに「Yes／No」で答えるシンプルな調査で地域特性に切り込む研究を始めました。例えば、GNPが高いといわれる日本に「幸せ」と感じる人がさほど多くなく、その真逆の国もある。これが雑誌などで話題になりました。このような流れを経て、日本でも「幸せ」「豊かさ」はお金やモノだけでは測れないということが見えてきたんだと思います。

市長：平成25年に荒川区をはじめ多くの自治体が賛同して「幸せリーグ」（※1）が設立されました。高浜市も参加していますが、おっしゃったように測りにくいにもかかわらず、自治体の間では「行政サービスと住民の幸福実感」という視点が斬新で注目されています。こんなふうに「幸せ」という言葉がこれほど受け入れられたのはなぜなんでしょう？

山崎さん：おそらく、拍車をかけているのは高齢化だと思います。〈幸せ曲線〉（※2）が、ヨーロッパのようなU字型ではなく、日本はL字型になっていることが問題視されている。ヨーロッパだと30代・40代は歯を食いしばってがんばって疲れていても、リタイア後はハッピーになるんです。日本はL字型で、高齢になっても幸せ度は低いままという図になってしまっている。これでは未来がない感じがするし、幸せづくりという点では、やはりU字型をめざすことが大切であり、そこに必要な要因は絶対にお金とかモノではないはずだということです。じゃあその要因とは何かを考えていかなきゃい

（※1）幸せリーグ
住民の幸福実感向上をめざす基礎自治体連合。荒川区の公式ホームページから検索可

（※2）幸せ曲線



（上から）
高浜南部、
吉浜、
翼、
高取、
高浜
まちづくり協議会
の活動

けない。世界に先駆けて高齢化している日本の中でも、高齢者に焦点を当ててやっていこうとしている自治体では、それを意識しなくてはいけないというのが、まさに２０００年代に大きく動いた価値観の変化だと思います。人とのつながりや信頼関係であったり、信頼が生み出す安全・安心な状況であったり。それを創りだしていくことが、幸せを創りだす一番の土台になっていくと思います。

市長：「幸せとは?」と市民の皆さんに問いかけると、やはり、まちが安全・安心であることだという声が多く寄せられます。もちろんそれは重要な点ですが、今おっしゃっている安全・安心とは、道路整備や防潮堤などという部分とは違う切り口ですよね。

山崎さん：そうですね。やはりハードではなくて、国土強靭化とはまた違う視点で幸せの土台をどう作るのかということです。例えば監視カメラや柵がブワーッといっぱいあるまちに住んでいて安心かというと、そうじゃないはず。信頼できる人とどれくらい知り合っていて、どこから先が危険なのかがわかるということが安心につながるわけで。情報をどれだけ得られているかも影響していると思う。その安心の土台を形成するものが一体何で、さらにその土台の上で人と人がつながって新しくワクワクできるものがあるとか、一歩外に出て誰かと語り合って笑顔になれるとか、そもそも家を出るきっかけを作る「何か」がすごく大事な気がします。その辺にまちづくりというのは大きく寄与できる。まちづくりは都市計画や産業振興のためではなく、社会福祉や社会教育のためでもないけれど、たぶんその全部に影響するようになっていて、じゃあ何のためかというと「人々の幸せ度をあげるためにやっている。」となると思います。

山崎　亮（やまざきりょう）
コミュニティデザイナー
Studio-L 代表、東北芸術工科大学教授
（コミュニティデザイン学科長）
1973年愛知県生まれ
地域が抱える課題をそこに住む人が解決するためのコミュニティデザインに携わる。「海士町総合振興計画」「マルヤガーデンズ」「震災＋design」でグッドデザイン賞受賞。著書は『コミュニティデザイン　－人がつながるしくみをつくる』（学芸出版社）他がある。ＴＢＳ「情熱大陸」ＮＨＫ「東北発☆未来塾」などテレビ出演も多数。

自分たちが、かかわること

市長：私は詩人の相田みつを（※3）さんの「幸せはいつも自分の心が決める」という言葉をまさにそのとおりだと思っています。自分の心が決めて形がないものですから、それを構成するものは何かと考えるといろいろなことがある。

「行政というのは住民を幸せにするシステムである」という考え方がありますが、我々がすべきことは、山崎さんがおっしゃった「地域において皆さんが幸せと感じることはそれぞれ違うだろうが、どうしたら幸せと思えるんだろう?」を考えること。「幸せですか?」に「Ｙｅｓ」と答えてもらう

（上）芳川町海岸で行われている「海の生き物観察」。海辺の環境をテーマにした団体「渡し場かもめ会」が主催
（下）「昭和で元気になる会」の回想法を使った事業

（※3）相田みつを（1924～1991）書家・詩人。代表作は「にんげんだもの」

ためには何が必要なのかと探ること。なかでも大きいのは「自分たちが、かかわること」。かかわることでつながりができるし、かかわったことが満足感になると思います。日本で高齢者の幸福度が低いといわれるのは、社会での活躍の場を失ったと思ってしまうことが原因のひとつなので、そこに居る必要性を感じられるような「かかわり」を作るのが大切だと思っています。

だから私が「しあわせづくり計画」で描き示したい「地域がみずからできること」というのは、顔がツナガル、人がツナガル、そしてそこに安全や幸福が生まれるであろう、かかわることで満足感も上がるであろうというようなことなんです。

山崎さん：だからこそ住民参加が不可欠なんですよね。行政は住民・人々の幸せを作るシステムである。あらねばならぬ。まさにそのとおりです。しかし、行政は個々人の人たちが何をすると幸せかを全部把握できているのかというと、やはりできていないと言わざるを得ないし、できているというとウソになる。それぞれの人たちに聞きに行き、その人たちに何をしているのが結果的に幸せなのかを、ちゃんと表明してもらわないといけない。

吉岡初浩（よしおかはつひろ）
高浜市長
1955年愛知県生まれ
高浜市議会議員を経て
2009年９月高浜市長に就任。
現在２期目

ただ、今の話のとおり、その人たちが主体的にかかわるという行為自体が、すでに幸せ度を少し上げることになっている。その上に個々人の違う幸せを選び取って、地域テーマ型のコミュニティみたいなものをつくると、自分が幸せだと感じるテーマのところに集まってくる。「やりたい！」と思えることをやっていたら地域のためになり、誰かに感謝されるという関係性の構築が、結局やっている本人たちの幸せ度を上げることになると思います。

市長：それは受け身の状況では絶対に生まれてこないと思っています。自分がかかわって進めていくところに一番大きな意味がある。

将来的に、例えば小学校区単位で地域計画を考え、予算を持ってココの部分だけはやろうというシステムもみんなで考えられるといいなと思っています。そこに至る経験が今は積み重ねられていると思います。それをつなげていくには、さっきも出ましたが、若い世代が今以上に興味を示してくれることが必要です。

「自分ごと」への転換

山崎さん：若い人たちがいきいきと活動できる場の担保は、どこでも課題です。おっしゃるように、そこができていないと次の世代につながっていかない。

市長：地域の課題の大半は「行政が解決するもんだ！」と思っているというようなことをよく聞きます。なんとなく他人ごとという感じですね。でもそうではなくて、地域の課題を「自分ごと」にしていくようにしなければと思っている

（上）洲崎公園桜祭りに集まった元気な笑顔。楽しく地域が集うのはまさに「土手の花見」
（下）高浜川での夏の風物詩「市民レガッタ」。市内外から若い世代がエントリーする。

（上から）中学生と赤ちゃんのふれ愛交流事業／夏休み講座「ジュレづくり」／映画『タカハマ物語』の１シーン／石巻市大川小学校を訪れた子ども防災リーダー養成講座のメンバーたち

んです。若い人が「高浜には楽しめる場や活動できるようなことが何もない」ということから、「アミューズメント施設やテーマパークがあればいいのに」という話になったりする。そうではなく、若い人たち自身が主体になってかかわれることをみつけてほしい。

自分ごととして地域の問題を捉える姿勢が若い人の中に出てくると、今まであまりまちのことに関心のなかった人たちも「自分もやらなきゃ」って気づくのかなと思います。

楽しさを生み出す技術を手に入れた人は人生ずっと楽しい！

山崎さん：結局、幸せは自分の心が決めるのですが、幸せ度をアップさせる基礎のところには、自分がかかわれているかどうかという点がある。「参加型」って言い尽くされているけど、やっぱりそれは大事で、じゃあその参加に必要なものは何かと言ったら「楽しさ」だという気がします。「楽しさなくして参加なし」だと。

市長：そのとおりですね。

山崎さん：そして「参加なくして未来はない」んです。実際に参加しようとした時に、眉間にシワ寄せて参加！参加！って言っても長続きしないし、人も増えない。「楽しさなくして人の参加はない」ですよ。ではその楽しさとは何だろう？まさに『豊かさとは何か』の次に「楽しさとは何か？」っていう本を書かなきゃいけないんじゃないかと思うくらいです。しかし、アミューズメントパークとか郊外の大型店で「楽しませてもらう」のは、真の楽しさではないと思います。「自分たちでいかに楽しさを生みだす技術を手に入れるか！」これを手に入れた人の人生は、楽しいんです。当たり前だけど。楽しさを生みだす技術を自分で手に入れているわけだから、楽しくなくなったら、また次の楽しさを生みだせる。だから、何かを呼んできてほしいとか、○○ランドみたいなのやおしゃれなショップが欲しいとか、やってほしいことを誰かに期待するよりは、欲しければおしゃれなショップを自分たちで作っちゃえばいい。めちゃめちゃ抜群におしゃれなやつを。そうすれば、それはすごく楽しいことのはず。

市長：そうですね。自分で作ってしまうことの方が絶対に楽しい。

高浜市では市民ムービーを制作したんです。『タカハマ物語』（※4）というタイトルで中学生が主人公をつとめ、制作にも市内の中高生がいろいろな役割をもって参加しました。自分のまちを見直して愛着を持ってほしいなというのと、若者の力でまちの新しい魅力を引き出して発信してほしいなという想いがありました。関係した若い人たちは、自分のなかで相当変化があったようです。こういう取組みが発展して「まちを盛り上げるために自分にはこれができる。」みたいに、まちを一人称で語ってくれる方が増えてくれればいいなと思っています。

山崎さん：いい取組みだと思います。そうした「楽しさを自分たちで作り出せる力」をどう生み出し

（※4）『タカハマ物語』
２０１２年
監修・堤幸彦氏
監督・石丸みどり氏
104分
出演者から制作、上映まで延べ約６，０００人の高浜市民が参加。
現在、第２弾『タカハマ物語２ 心のツバサ』制作準備中。

ていくのかがとても大事ですよね。それが可能になってきたら、たぶん「あれがない」「これがない」という状態ではなくなってくると思うし、幸せっていうのは、きっとそこにすごく近いんですよ。だからさっきの、相田みつをさんの言葉は、そのことも含めて、「楽しさは自分で生み出すこと」。「幸せはあなたの心が決める」というのは、つまり心自体が「これが楽しい・おいしい・美しい」と思える能力を高めれば全部楽しいから、結果「幸せ」なんですよね。

市長：そうですね。感性を高め、豊かにできれば、きれいだし、楽しいし、嬉しいしっていうようになると思いますね。それぞれ個人が「楽しいこと」を決めるのだとしたら、行政がすべきことは何が楽しいのかを探るための「対話」であったり、一歩踏み出していく「きっかけ」を生みだす仕組みを考えていくことが必要になってくるわけですね。これまでも高浜市では、100人規模で市民と行政が集い、第6次総合計画をつくり、その進行も見守ってきました。映画作りや防災活動を通じ、子どもたちとまちの新たなつながりを生み、育んできました。並行してざっくばらんに話し合う場も生まれ、今も続いている集まりもあります。テーマも緩やかで、すぐに脱線してしまったりもするんですけど（笑）。

これからも市民一人ひとりが自分のしあわせを決めていけるよう、一人称で「自分ができること」を考えるきっかけであったり、一歩踏み出すための基礎を作っていきたいと思います。

平成 26年 11月 12日
高浜ニコニコ鬼広場（高浜港駅前）にて

コラム　いまなぜ＜幸せ＞なのか？　山崎 亮さんに聞きました

「豊かさ」から「しあわせ」へ

「真の豊かさとは何か？」その問いかけは1970年代くらいから始まったようです。1980年代には書籍も登場し、その集大成が、著者のドイツでの体験から「真の豊かさとは働き方や心のゆとりである」と論じた『豊かさとは何か』（暉峻淑子著1989年）だと思います。それ以前にも、アメリカのロバート・ケネディが、詩を読んだり絵を描いたりという私たちの豊かさを示すものは GNP（国民総生産）とは違うところで動いているのではないかと語るなど、戦後～高度成長期の反省から、お金やモノをたくさん手に入れることが豊かさではないと先進的な人たちは気づき始めていたのです。しかし、一般の人々にとっての“豊かさ”の基準は「広い家に住めるようになった。」「自家用車がある。」という次元からなかなか脱することはありませんでした。

しかし、ブータン王国のワンチュク国王が GNH（国民総幸福量）を就任時に語り、その考え方をイギリスやアメリカが自国に持ち帰った。日本でもそれを輸入するかのごとく「幸福であるということは何か？」という問いかけが1990年代後半から始まったのです。

また、「経済学は幸福を定義できない」と長くいわれてきたのですが、エラスムス大学（オランダ）が「あなたは幸せですか？」を Yes ／ No で考えさせるというシンプルな調査を行いました。「Yes」が多い国について経済的な見地から切り込む研究です。日本での同様な調査では、例えば福井県が幸福度が高いというような指標が出ているかと思います。あるいは、国際的にみて日本は GNP が高いといわれるが、「幸福 Yes」がさほど多くなく、フィリピンは同じアジアで GNP は低いが、「Yes」が多い。これはなぜかという疑問が2000年ごろに雑誌で取り上げられ、話題になったことは記憶にあるのではないでしょうか。

『豊かさとは』では得られなかった気づきが『幸せとは』で得ることができたということかもしれません。

太鼓の達人 「夢童」佐藤トシミさん（8／15号）

とどけ
太鼓の響は夢と希望

消防団第一分団
夏の県操法大会で
5位入賞

仲間がいる
から
がんばれる。

歌の達人 酒井玲子さん（12／15号）

歌の翼に乗って
広がる喜びの輪

うごくことが

「なにかを与えてもらうのを待つ」、「楽しませてもらう」ではなく自分自身が動くこと。そのことで、誰かがその楽しさを共有し、また新たな動きが生まれていく。

あなたのすぐ近くにある笑顔です。

まちづくり活動のひとコマと、平成26年度「地域の達人」（いろいろなジャンルで地域で活躍する方）として『広報たかはま』で紹介した方からのメッセージです。

高浜小学校
付近の見守
り活動

いってきます。
いってらっしゃい。
ただいま。
おかえり。

『タカハマ
物語2 心の
ツバサ』制作
スタート

みんな心に
ツバサを
もってる。

読み聞かせの達人 松本仁さん（5／15号）

キラキラの
瞳がうれしい。

どろんこ祭りin翼

お父さんたちの
方がむちゅう
だよー！

しあわせ笑顔の写真館

自分自身が しあわせ

着付けの達人　神谷新恵さん（11／15号）

皆さんを美しくする しあわせ!!
私もめけていただいています。

赤十字奉仕団の皆さんが中学生にAED講習

ぼくにも
ひとの命を
助けられる。

バラの達人　岡本司さん（6／15号）

バラと絵
夢中になれる趣味がある幸せ！
この感動と達成感をみんなに
伝えたい。共有できる仲間が
たくさんできたらうれしい。

チャレンジドたちが南部ふれあいプラザの周辺を清掃しています

声をかけてね！

吉浜まちづくり協議会の青パト乗車体験

地道に安全を
「まもるくん」。

ブラジル料理の達人　梅野エリカ メグミさん（4／15号）

地球の反対側でも
故郷の味を!!

東北支援ボランティアのひとコマ
おいしいと好評でした

こういう
「とりめし」
もある。

私＋たかはま

たかはまと自分の関係を一人称で語る

たかはまを一人称で語るなら

自分の住むまちのことを「私のまちでは」「私はこうなってほしい」と一人称で語ることは、他人事ではなく「自分ごと」としてまちの今とこれからを考えること。

ずっとこのまちで暮らしてきた方、縁あってこのまちに来た方、このまちで育つ方、あなたにとっての”たかはま“を教えてください。

瓦屋のムスメの見てきたたかはまを伝えます

神谷弘子さん（文化財保護委員）

昔の瓦屋は本当に大変で、苦労した母は女も手に職をと大学に行かせてくれました。このまちで教員生活を全うした今となっては、教え子に、もっと瓦づくりやまちの昔話をしたらよかったなあと思って。今は市の文化財保護に関わったり、地域の文化を語る会に参加したり。意識はしていないけどやっぱり瓦への想いは強いのかな。娘が瓦屋根の家を建てたとき、想いのリレーを感じて嬉しかったわ。私の思い出話でもまちの歴史を語る役に立てばいいなと思っています。

地元ＬＯＶＥ！伝統芸能とまちの安全を守りたい

岩月祐樹さん
（消防士、えんちょこ獅子保存会会員）

小学４年生でチャラボコを始め、南中学校に入学してから「えんちょこ獅子クラブ」で獅子を演じるように。ふたつの伝統芸能に触れてきて、平成 17年の愛知万博公演でそれらを守ることの大切さに目覚め、当時からの仲間と保存会に入りました。みんな仕事で多忙ですが、時間の許すかぎり南中生の指導に行っています。とにかく地元ＬＯＶＥ！今は消防士として、生まれ育ったまちの安全・安心も守りたいと思っています。

赤ちゃんとの暮らしで、まち再発見中

尾崎奈穂美さん（主婦、「声の広報」ボランティア）

高浜市にはお嫁にきました。ほとんど知り合いもいない土地で育児がスタートして、楽しいけど、たまには外出したいし、お友だちもほしいなと思って。保健師さんにもらった冊子で初めて知った「いちごプラザ」など子育て施設を積極的に利用して、仲良しもできました。今は、少し自分の時間も作れたらと、広報で見たボランティアにも応募したりして、子育てを介して地域を再発見している感じ。子どもの成長とともに私の関心ももっと広がっていくかなと思います。

『たたかえ！お母さん　1』（ベネッセコーポレーション）より
公園デビューをテーマにした漫画のひとコマ
©たかはまこ

笑い声いっぱいがいいな

たかはまこさん（漫画家）

出身地をペンネームにしたのはデビューのとき、軽い思いつきで。でも、生まれ育ったこのまちへの愛情表現でもあるかなって思います。出産を機に東京から戻り、20年以上、高浜市を舞台に子育てマンガを描いてきました。子どもの失敗や親のカン違いも、愛情があるからこそ笑いになります。それってとても幸せなこと。大人と子どもの笑い声いっぱいのたかはまであってほしいと思います。

1981年漫画家デビュー。長男誕生後、子育ての毎日を描いた作品が話題に。『広報たかはま』では市民から寄せられたエピソードで四コマ漫画を執筆。主な作品は『たたかえ！お母さん』（ベネッセコーポレーション）、『B級ママでいこう！』（主婦の友社）、『笑うママの生活』（竹書房）

子どもにもできることがあると伝えたいです

杉浦涼音さん、藤すずなさん、榊原一真さん、岡田野乃佳さん、藤堂ひかるさん、桂川昌大さん
（高取小学校６年生、H26こども防災リーダー養成講座受講生）

「東北の被災地で、津波で壁が無くなった校舎や持ち主のわからないランドセルを見て、涙がでました。」
「考え方が変わった。家や学校、身近な場所の標高を覚えました。」
「家族とはぐれたら嫌だから避難場所を話し合いました。」
「災害時に役立つものの作り方を友だちにも教えたいな。」
「近所の人と繋がりが強ければ避難所でも心強いと思うから、ちゃんとあいさつをします。」
「僕たち私たちにできるのは、みんなに防災について伝えることだと思います。」

―「石巻市に視察に行ったことで、木々があり花が咲き、学校があってみんなが笑っている、自分にとっての当たり前が、永遠に続くものではないということを知ったみたいです。」―
（ひかるさんのお母さん）

「よそ者で研究者」の眼に映る たかはまの歴史と今の魅力

金子　智さん、安藤さおりさん、今泉岳大さん
（高浜市やきものの里かわら美術館学芸員）

「人々がみんな明るくて伝統があるまち。歴史を調べていくたびに楽しい発見があります。」
「着任したころ、辻々にあるちょっとしたお堂の屋根瓦がどれも豪勢で驚きました。地域の方に昔話を聞いて、紡いでいきたいです。」
「いろんなものがギュッとまとまっていて便利。ものづくりのまちだからか、美術に対しても柔軟な印象があります。」

とことん 聞き書きしたい底深さ

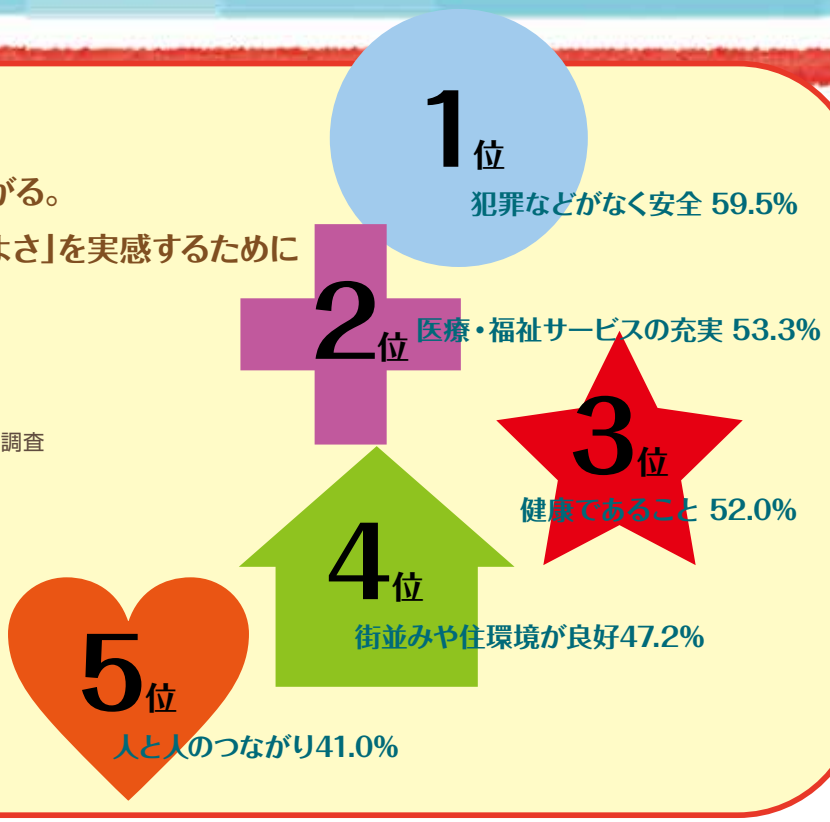
佐野直子さん
（名古屋市立大学大学院准教授）

勤務校で実施している「聞き書き」実習が縁で、高浜市をたびたび訪れています。「鬼みちまつり」の皆さんのパワーには圧倒されました！見たいもの、聞きたいものがまだたくさんあります。皆さんのお話、聞かせてください。

幸せは「心地よさ」ともつながる。たかはまに暮らす日常の「心地よさ」を実感するために大切だと思うものは?

市民意識調査　平成25年11月実施
18歳以上市民から無作為抽出の2,500人に調査
回答率39%

回答者975人の複数回答でトップは「安全なまちであること」。「医療・福祉」「健康」「住環境」に続き、5番目に「人と人のつながりがあること」という絆の大切さが入ってきています。



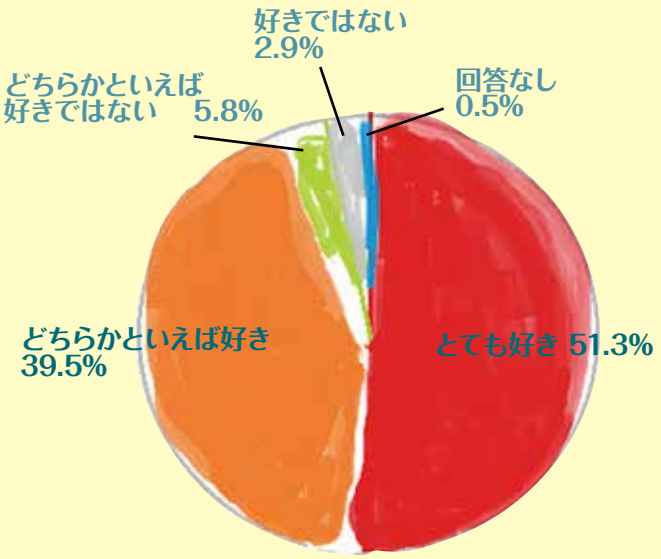
別冊 広報たかはま
新春特別号

大家族たかはま
しあわせ まちづくり

たかはまに住む子どもたちは、このまちが好きなのかな?

小・中学生アンケート
平成26年4月実施
高浜市内の小・中学校に通う
小学3年生から中学3年生
合計3,543人に調査
回答率97.3%

「とても好き」と「どちらかといえば好き」をあわせると、90.8%。人数にして3,130人。



思いやり 支え合い 手と手をつなぐ 大家族たかはま

［編集後記］
取材中嬉しかったのは「地元LOVE!」「大家族たかはまって温かいよね。」という声を聞くことができたこと。また、コミュニティデザイナー山崎亮さんの「自分で楽しさを生み出せる人は人生ずっと楽しい」という言葉も目からウロコでした！まずは自分ができることから動いてみる。それが高浜市に住む「私の幸せ」「みんなの幸せ」への第一歩。
今年も『広報たかはま』は、まちのいろいろな情報をお伝えし、あなたの一歩を応援していきます！

別冊　広報たかはま　新春特別号
「大家族たかはま　しあわせまちづくり」
平成27年1月1日
編集・発行／高浜市役所総合政策グループ
〒444-1398　愛知県高浜市青木町四丁目1番地2
TEL（0566）52-1111　FAX（0566）52-1110
http://www.city.takahama.lg.jp/
電子メール　info@city.takahama.lg.jp